

# 保護されたエゾタヌキの再放逐と その後の経過について

増田 泰

〒099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49番地  
斜里町立知床博物館

## 1. はじめに

知床博物館では開館以来、傷病野生鳥獣の受け入れを行ってきた。それらのうち回復した個体については順次野外に再放逐しているが、個体数が少ない、捕獲することが難しい、研究例が少ない種については、標識や電波発信器の装着によって放逐後の追跡調査も行っている。北海道に分布するエゾタヌキ (*Nyctereutes procyonoides albus*) は本州以南に生息するホンダタヌキ (*N. p. viverrinus*) に比べ、調査報告例は少ない。そこで今回交通事故で保護されたエゾタヌキに、回復後、電波発信機を装着し放逐したところ、越冬期を含む約9カ月にわたり行動を追跡することができたので報告したい。

## 2. 放逐の経過

1997年9月24日斜里町日の出の国道でエゾタヌキが車にはねられ、後続車両のドライバーにより町内の動物病院に収容された。幸いエゾタヌキに大きな外傷はなく、一時的なショックで仮死状態になっただけであった。動物病院から博物館に移されたタヌキは10日後の10月4日保護地点にほど近い山林に放逐された。放逐の際には塩酸メドミジン0.4mgと塩酸ケタミン5mgの筋肉内投与によって不動化、各部の計測とキツネ用電波発信器を装着した。作業終了後、塩酸アチパメゾール2mgを筋肉内投与しケージ内で覚醒させた(表1・表2)。その後車両で放逐現場に移動、覚醒から1時間後に放逐した。放逐時にはケージの扉を開放すると同時に、走り出して林内に姿を消したため、麻酔からは完全に覚醒していたと思われる。

## 3. 保護・放逐地点周辺の環境

保護・放逐地点の位置図を図1に示す。保護・

表1. 計測値

性別	オス
体重	4,450 g
全長	68 cm
頭胴長	51 cm
胸囲	35 cm
胴囲	31 cm
首周り	20 cm
体高	31 cm
尾長	17 cm
後足長	右12 mm 左12 mm
掌幅	右34 mm 左32 mm
掌長	右44 mm 左44 mm
足幅	右33 mm 左32 mm
足長	右42 mm 左43 mm

表2. 麻酔記録

経過時間 (min's)	
0'00	塩酸メドミジン0.2mg i.m
7'38	目隠しをする
8'56	暴れる
10'28	塩酸メドミジン0.2mg i.m
16'14	塩酸ケタミン5mg i.m
19'27	不動化。外部計測開始
29'16	発信器装着
31'02	呼吸数24/min
42'42	呼吸数18/min
46'18	作業終了。塩酸アチパメゾール2mg i.m
47'47	呼吸数30/min
48'45	首を動かす。目を開ける。
49'50	呼吸数34/min
50'09	上半身を上げる。
51'00	完全に立ち上がる。
1回目の塩酸メドミジン投与から不動化まで	19分27秒
塩酸ケタミン投与から不動化まで	3分13秒
不動化から塩酸アチパメゾール投与まで(作業時間)	26分51秒
塩酸アチパメゾール投与から覚醒(立ち上がり)まで	4分42秒

放逐地点は知床半島基部の海岸段丘上で、斜里町市街と知床国立公園の玄関口ウトロの中間に位置する。付近はオホーツク海の沿ってオオイタドリやオオブキなどの群生した草原が細長くのびており、その背後には標高100m付近まで急傾斜の段丘斜面が続く。この斜面はミズナラやエゾイタヤ、シナノキなどの広葉樹林となっている。さらにこの急傾斜地の上には緩傾斜の台地が広がり、本来の植生は針広混交林であるが、現在はアカエゾマツ・トドマツの造林地と一部農耕地となっている。小河川と無数の小さな沢が谷を刻んでオホーツク海に流れ込んでおり、台地上には小さな沼や湿地が点在している。

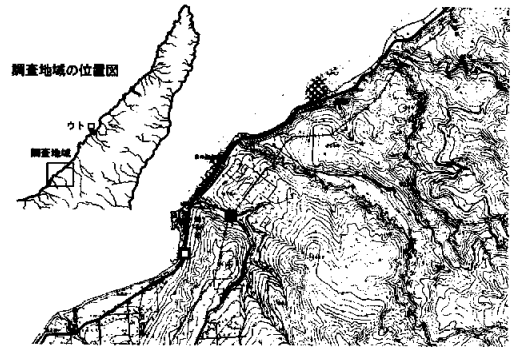


図1. 図1：調査地域の位置図  
□が保護地点. ■が放逐地点.

#### 4. 発信器による行動の追跡

放逐後の追跡は、装着した発信器からの電波を、3素子八木アンテナを装着した受信機で3点以上の場所から受信、方探し、発信源の方角が1/25,000の地形図上で交わる点または多角形の重心をタヌキの位置とした。方探しは原則的にタヌキの活動が低下する昼間に行い、放逐後越冬のためのねぐらに定着するまでは4日に1回以上、その後は1週間に1回以上行った。

##### ・放逐から越冬穴定着まで

放逐直後の10月は最初の2週間ほどの間、放逐点周辺の農耕地に滞在した。この期間昼間は農耕地に点在する伐根の集積場所や周囲のアカエゾマツ幼齢造林地などで休息していた。農耕地を離れた後は定点に定着することなく大きく移動を続けたが、10月末には次第に海岸線に沿った段丘斜面を中心としたエリアを多く利用するようになった。

その後11、12月についても、海岸線に沿った段丘斜面を中心としたエリアにとどまった。最外郭法によって求めた越冬までの各月の行動域を図2に示したが、行動域は放逐後月を追うに従い縮小し、10月が1090ha、11月320ha、12月には39.8haまで減少した。

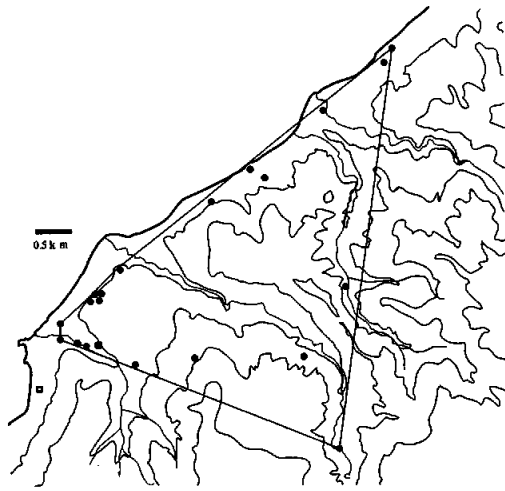
1月7日以降電波による位置確認では定点から移動がみられなくなったため、現地調査を行ったところ、電波の発信源を特定することができた。電波はエゾイタヤの天然樹洞内部から発信しており、発信器を装着したエゾタヌキがこの樹洞を越冬のためのねぐらにしていることが判明した。樹

洞のあるエゾイタヤは海岸から急斜面を登った標高100mほどの段丘の辺縁にあり、胸高直径70cmほどで、斜面に対し大きく斜めに枝を伸ばしていた。根元には根と根の俣の下に幅25cm、高さ15cmほどの穴があり、樹洞とつながっていた(図3)。穴周辺の雪面はタヌキの出入りのためか土で汚れていた。樹洞は一番下の部分で奥行き最大120cm、幅最大200cmあり、空洞は上に2mほどの高さまで広がっていた。この木の周辺には高さ1~2mのトドマツ幼木が密生しているため、人や大型の動物には見通しが効かない上、無数の小枝が障害になり容易にはたどり着けない場所であった。しかしそれらはエゾタヌキの体高では全く移動の妨げとはならず、越冬場所としては好適な環境であった。この木の周囲にはエゾタヌキの足跡が無数についていた。

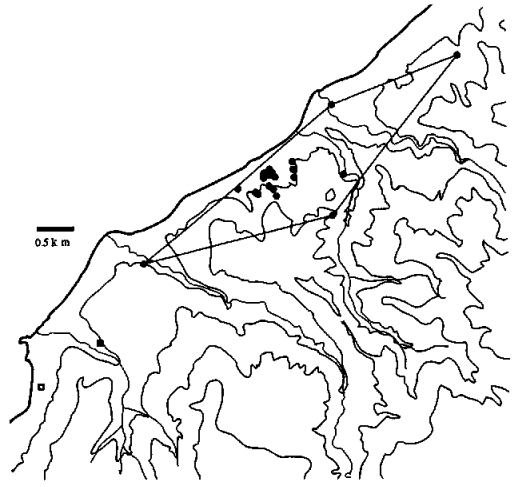
その後も、海岸線の道路からの方探しでは越冬場所付近からの移動は認められず、2月10日、12~14、16~20、25~27日は現地調査で樹洞内から電波が確認された。3月に入り、3月15日までは越冬樹洞付近にいたことが電波で確認されていたが、3月29日にはこの場所から大きく移動した。

##### ・越冬明けから追跡終了まで

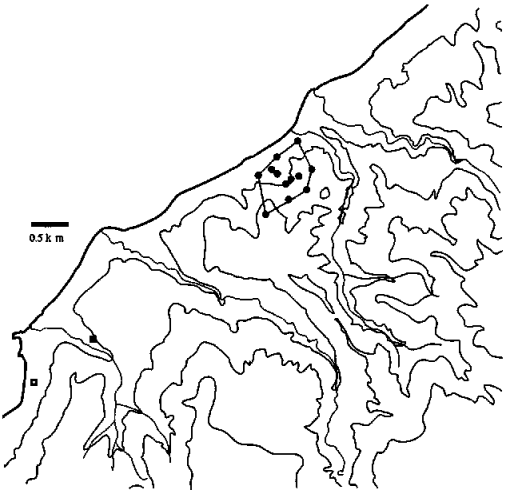
越冬明けの3月末から4月はエゾタヌキの活動は海岸線に沿った段丘の急斜面とその下の海岸草原に限定された(図4)。ここは段丘斜面は急傾斜の上、海からの強風で雪が飛ばされ積雪が少ない。また海岸草原も強風で雪が少なくさらに日当たりがよいため、これらの場所は他よりも雪解けが早い。そのためこの時期には多数のエゾシカが食物を求めて集結する場所でもある。エゾタヌキ



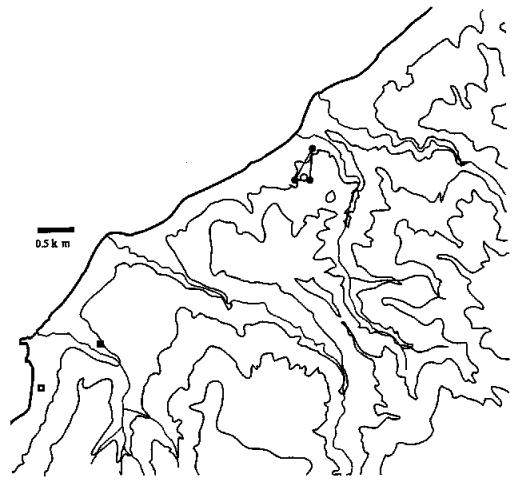
2-1:10月



2-2:11月



2-3:12月



2-4:1月

○が越冬穴の位置

図2. 越冬穴に定着するまでの各月の行動域。

●がタヌキの位置。□が保護地点。■が放逐地点。

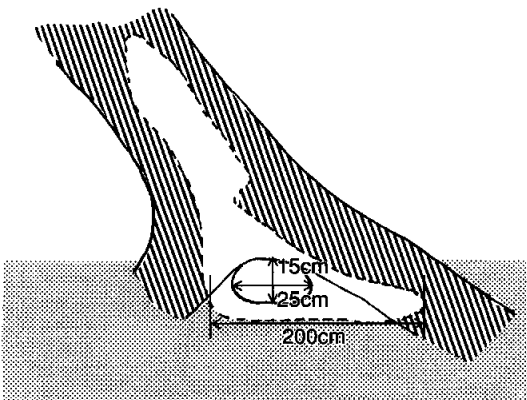


図3. 越冬穴の見取り図

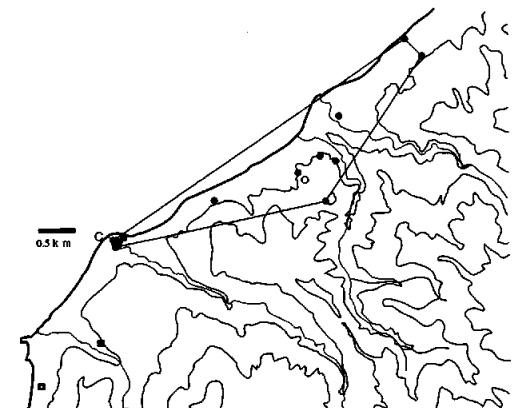


図4. 越冬穴を離れてから見失うまでの行動域 (3月29日～7月13日) ○が越冬穴の位置。Cは網洗いの場のある地点。

にとっても他に先駆けて雪解けが進み、採餌しやすいため、よく利用したのではないだろうか。

5, 6, 7月についても4月と行動域は大きく変わることはなかった。海岸草原と背後の急斜面が活動の中心で、海岸線に対し平行に移動することはあっても斜面を登り高標高地に移動することはなかった。

6～7月にかけて、のべ16観察日、ある河川の河口部に定着することがあった。ここに定着した時期は漁業者が河川水を汲み上げ高圧ホースで漁網の洗浄を行っており、洗浄場所周辺と洗浄水が流れ込んだ河口部には網から落ちたチカなどの小魚が散乱していた。この場所に無人自動撮影カメラを設置したところ、追跡個体かどうかは識別できなかったものの、この魚を食べるエゾタヌキが撮影された。夜間だけでなく日中正午近くに撮影されたものもあり、昼間も採餌していたことがわかった。

またこの河口部には海岸線に平行に国道が走っているが、追跡個体は国道法面の排水管をめぐらしたことがあった。海岸草原は初夏にはオオイトドリが繁茂し、タヌキにとっては最良の目隠しとなるため、たとえ道路から数mの至近距離でも、エゾタヌキにとって安全な場所となっていた。オオイトドリの群生地の中にはタヌキが頻繁に利用する通路、いわゆるタヌキ道があった。このタヌキ道にも無人自動撮影カメラをセットしたところ、毛色と顔面の隈取り模様のパターンから個体識別すると、少なくとも2頭以上の個体がこの通路を利用していた。この2頭に発信器は装着されており、追跡個体ではなかった。ここでも日中の通路利用が確認された。このタヌキ道は網洗いのある川の河口部につながっており、この通路を通り、網から落ちた魚を採餌していたらしい。

追跡個体は7月13日この網洗いのある河口部での確認を最後に、電波の発信を確認できなくなった。3月29日越冬場所からの移動を確認してから、最後に確認された7月13日までの行動域の面積は341haであった。

## 5. おわりに

エゾタヌキの行動域は平均80haと報告されている(宮木1990)。今回の調査結果ではこれらに比較すると広がった。10月については放逐直後

ということもあり、その影響が考えられるが、越冬明けから見失うまでの3月29日から7月13日までの行動域でも341haとはるかに広がった。しかし追跡個体が6～7月にかけて漁業者が網を洗浄した際に落ちた小魚という人為的な餌資源を利用している間は、ほとんど移動は見られず、その場に定着した。またここでは追跡個体以外の個体も複数観察された。今回追跡個体が利用した行動域には人家がほとんどないため、網洗い場以外での人為的な餌への依存はほとんどなかった。しかし今回の結果から推察すると、人間の生活場所と隣接して暮らし、人為的餌資源に依存しているエゾタヌキでは、その行動域は非常に狭いエリアに限定されることが予想された。また網洗い場という臨時的な餌場の出現に対し、複数の個体が、即座に利用していたことから、エゾタヌキは環境の変化に対して柔軟に適應する能力に優れていることがわかった。

## 引用文献

宮木雅美. 1990: エゾタヌキの生活と森林. 光珠内季報, 81: 17-21. 北海道立林業試験場.